

築地居留地に来た最初の宣教師

川崎 晴朗

はじめに

築地外国人居留地は、現在の東京都中央区明石町と同じ町域に、一八六九年一月一日（明治元年一月一九日）の東京開市と同時に設けられた。

築地居留地は、大きく「狭義の居留地」および「相對借り地域」に分けられ、現在の明石町にあたる地域に設定されたのが狭義の居留地である。ここにあった武家屋敷・町屋は、一、二の例外をのぞいて全部撤去され、一番から五番までの地所 (lot) が造成されたが（広さは、平均五〇三坪あまり）、東京開市の際はまだ造成工事はほとんどはじまっていなかった。したがって、外国人は狭義の居留地の北側・南側にあった町地のうち、「相對借り地域」と指定された地域で日本屋敷を相對で借り受け、住居とするはかなかった。

狭義の居留地で外国人を対象に第一回の競売が実施されたのは、一八七〇年六月二日（明治三年五月四日）のことである。計五十二の地所がせり落とされたあと、予備地に新しく八つの地所が造成された。狭義の居留地には、全部で六十の地所がつくられたことになる。

一八九九年（明治三二年）七月一七日、居留地制度が廃止され、これに伴ない、築地を含む日本各地の居留地も全部撤廃された。

筆者は、一八六九年初頭から一八九九年七月までの期間、築地居留地に住み、布教活動を行った各教派の宣教師について基礎的資料を収集して来たが、本稿では、どの教派のどの宣教師が最初に築地に住み付き、活動したかの問題を取り上げる。御参考になる点がいくつかかなりとも含まれているのであれば幸甚である。

一 資料について

築地に来た宣教師、とくに初期の宣教師に関する資料が十分に集まらないとしても、それはある程度までは無理からぬことである。彼等は、一八五九年七月一日（安政六年六月二日）に開港された横浜に船で到着した。大抵の場合、横浜に上陸した日は資料的に判明するが、横浜からいつ上京したかについては、陸路となるため、正確な日付がわからないことが多いのである。

横浜に *The Japan Weekly Mail* (以下、*JWM*と略す。) と題する英字新聞が刊行されていたが、「Shipping Intelligence」(のち「Latest Shipping」)の欄を見ると、客船の入・出港日、どこから来たか、どこへ向かうのか(寄港地を含め)、トン数などのほか、大抵の場合は、三等船室(steeage)の客をのぞく船客の氏名が載っている。しかし、この週刊新聞の創刊号は一八七〇年一月二二日付で、それ以前に横浜の土を踏んだ外国人のことはわからない。外国人が横浜から東京へ行く場合はどうか。一八七二年一〇月一四日(明治五年九月一二日)、横浜から新橋までの鉄道が開通したので、彼等はそれ以降は汽車で上京したが(片道約一時間であった)、それまでは馬か馬車にたよっていた。しかし、汽車にせよ馬車にせよ、東京に足を踏み入

れた日はなかなかわからない。宣教師たちの個人的な日記や故国の家族・友人などにあてた書簡、所属する教派の本部や彼等を派遣した外国伝道組織に送った報告などを探さなければならぬ。

日本各地の居留地にいた外国人のアドレスについては、香港や横浜で毎年刊行されていた外国人人名録がある。現在使用可能な人名録で一番古いのは *The China Directory* (HK: Shortrede & Co.) で、一八六一年版から数冊が保存されている。一八六五年ころからは *The Chronicle and Directory for China, Japan and the Philippines* (HK: Daily Press) が刊行されるようになった。こういった人名録に日本在住の外国人も載っているのであるが、詳細で正確であるとは必ずしも言い難い。

日本でも、一八七〇年代に入って人名録の刊行がはじまる。 *The Japan Herald Directory and Hong List* および *The Japan Gazette Hong List and Directory* (のち *The Japan Directory* と改題) の二つが主要なものであるが(横浜に刊行されていた *The Japan Herald* および *The Japan Gazette* の二新聞が毎年編集したもの)、全体に誤植やおくなが目立つ。また、どうしても横浜に住む外国人が中心となっているため、これら人名録で東京にいた宣教師たちのアドレスを知り、その移動をたどるのは決して容易な作業

築地居留地に来た最初の宣教師（川崎）

ではない。なお、外国人人名録の相当数が最近ゆまに書房の手で復刻され、『ジャパン・ディレクトリー 幕末明治 在日外国人・機関名鑑』のタイトル名で入手可能となった（全四十八巻、一九九六、一九七七年）。

前述したように、築地居留地には狭義の居留地と相對借り地域との別があり、狭義の居留地には計六十の地所があったが、そのそれぞれにつき、誰がいつ落札し、またいつ誰に所有権を譲渡したかを示す資料にしても完全なものはない。築地居留地は東京府が管理していたが、東京府が明治時代に作成した「居留地台帳」は東京都編・刊『東京市史稿 市街篇』第五四（一九六三年）に活字化されている（一九六、二四七頁）。しかし、この台帳は、一番から五二番までの地所につき、大体一八八七年（明治二〇年）ごろまでの情況を示すにとどまる。東京都編・刊『都史紀要』4、『築地居留地』（一九五七年）の附表B「築地外国人居留地明細」は台帳に基づいて作成されたものであるが、あとから造成された五三番から六〇番までの八つの地所に関する情報が加えられている。

もちろん、これ以外にも参照すべき資料は多く、筆者もその一部を使用した。ここでは、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八八年、以下『大事典』として引用する。）および武内博編著『来日西洋人名事典』（日外アソシエーツ、一九八三年、増補改訂普及版 一九九五年）のみを掲げ、

他の文献については引用のたびに指摘することとした。

二 築地居留地の居住環境

東京府が一八七二年（明治五年）に編纂し、東京都が第二次大戦後に刊行した『東京府志料』1（一九五九年）は、築地居留地（相對借り地域を含む。同書は「外国人開市場」としている。）の範圍につき、次のように述べる。

第一大區十小區鐵砲洲南ハ安藝橋川筋西ハ小田原橋川筋及入船町南八町堀北ハ稻荷橋川筋ヲ限トシ東ハ大川（注 隅田川）ニ至ル 明治元年十一月十九日之ヲ開キ勝手貿易ヲ許サル

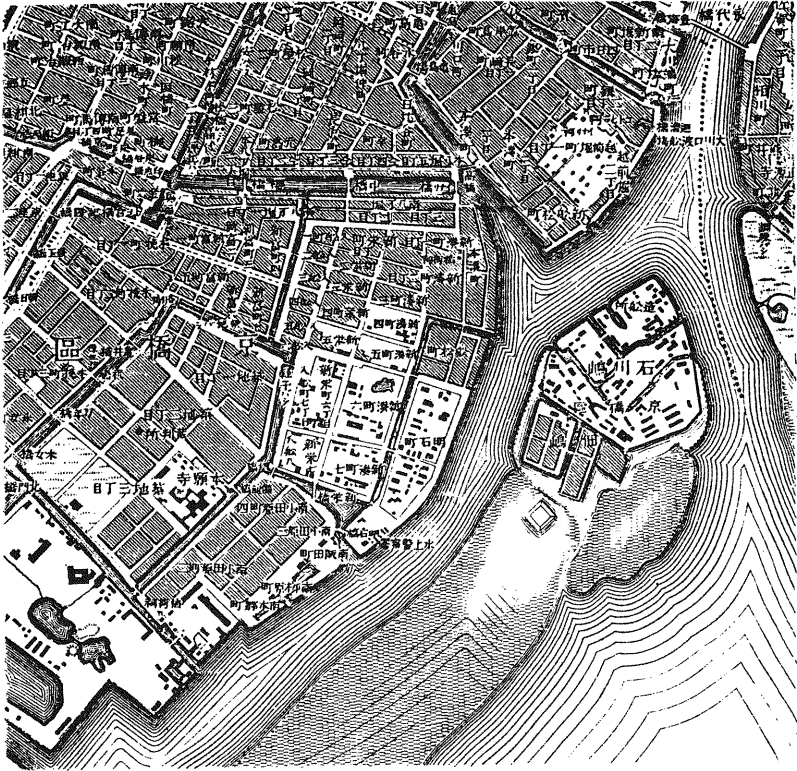
さらに、狭義の居留地（同書は単に「外国人居留地」としている。）の区域を次のように示している。

右同區入船町七町目新榮町六町目新湊町六町目七町目及明石町ナリ 此地ハ慶應三年十二月從前ノ商家ヲ取拂ヒ外国人ニ貸與フル所ナリ 地坪總計二萬六千六百七十二坪ニテ五十二區二分ツ（八頁）。

築地居留地の地理的範圍を、一八八〇年（明治一三年）の測量にかかる陸地測量部『東京近傍第六号（第一師管地方迅速測図 麴町区』（一八九七年三月三〇日刊）で眺めてみよう（図版）。

図版 1880年（明治13年）の築地周辺

史苑（第六一巻二号）



出所 陸地測量部『東京近傍第六号（第一師管地方迅速測図）麴町区』
（部分）（清水靖夫氏提供）

注 石川島・佃島の西にある陸地が築地で、明石町、新湊町六、七丁目、新栄町六、七丁目、入船町七、八丁目が狭義の居留地。その北側・南側に相対借り地域があった。（「南柳原町」は「上柳原町」の誤りである。）相対借り地域（南）の南西隅にあるスペース（南小田原町二丁目および南本郷町で囲まれている。）に、築地ホテル館があった。

築地居留地に来た最初の宣教師（川崎）

この地図により、狭義の居留地が明石町、新湊町六、七丁目、新栄町六、七丁目、入船町七、八丁目の七つの町で構成されていたことがわかる。『東京府志料』では新栄町七丁目および入船町八丁目脱落しているが、この二つの町が前述した予備地で、狭義の居留地に加えられたのは一八八九年（明治二二年）五月以後のことである。予備地には、五三番から六〇番まで、八つの地所がつくられた。外国人は、ふつう日本の町名でなく、地所の番号をアドレスとした。一八九九年七月、築地居留地が撤廃されると、居留地を構成していた七つの町は統合され、京橋区（のちの中央区）明石町が起立した。

また、この地図から、相對借り地域が狭義の居留地の北側および南側にある次の町を含むことがわかる。いずれも京橋区にあったが、カツコ内は現在の中央区の町名である。

（イ）北側

南八丁堀二、三丁目（新富一丁目、入船一丁目の一部）

船松町（湊三丁目）

本湊町（湊二丁目）

新湊町一―五丁目（湊一―三丁目）

新栄町一―五丁目（入船一―三丁目、湊一―三丁目の一部）

一部

入船町一―六丁目（入船一―三丁目の一部、新富一、二丁目）

（ロ）南側

南飯田町

上柳原町

南本郷町

（築地六丁目）

南小田原町一―四丁目（築地六、七丁目の一部）

相對借り地域は、当初は狭義の居留地が建設されるまでの一時的措置として設定されたものと考えられる。しかし、結局、一八九九年七月に居留地制度が廃止されるまで存続した。

宣教師に限らず、外国人は、築地にあったホテルに宿泊するのでなければ、（イ）狭義の居留地で、競売を通じて地所を入手し、家屋や職業上必要な建物を建て、または建物を借り受け、あるいは、（ロ）相對借り地域で家主と交渉し、日本家屋を借用したのである。

* * *

宣教師は、外交官・領事官またはお雇い外国人と違って、開市場・開港場（東京のほかにも六カ所あった。）の一部に設けられた外国人居留地に住むことを条約上義務付けられた。

しかし、実際には、少なからざる宣教師が居留地域外に住み、活動した。東京でも、築地居留地域外に「不正居住」する宣教師がいた。外務省・東京府は外国人の域外居住をきびしく取締まったが（東京都編『築地居留地』、一三八～一四八頁）、宣教師たちはさまざまな手段に訴えて築地以外の土地に住んだ。当局も、歳月の経過と共に、ある程度黙認するようになった様子である。例えば、カナダ・メソジスト教会（一八七四年、カナダ・ウェスレアン・メソジスト教会など三派教会が合同して形成したもの）の在京メンバーは、居留地制度が廃止された一八九九年、全員が築地居留地域外の麻布鳥井坂に居住していた。

(1) 初期の宣教師のうち、米国長老教会のタムソン (David Thompson) が神田一ツ橋にあった開成学校に、またローマ・カトリック教会のエヴラール (Félix Eyraud) が三田聖坂上の済海寺にあったフランス公使館にそれぞれ勤務した時期があり、築地居留地域外に住んだ。また、アメリカ・オランダ改革派教会のヴァーベック (Verbeek) フルベッキとして知られる。フルネームは末尾の「付記」参照)は一八五九年(安政六年)、長崎に上陸、同地や佐賀で布教や教育にあたりつていたが、一八六九年(明治二年)、太政大臣三条実美の嘱を受けて上京、開成学校の教師となり、一八七二年、その後身・大学南校の教頭となった。翌七三年辞任、左院に転じ、さらに七五年、元老院顧問に就任した(『大事典』、一二四七頁)

史苑(第六一卷二号)

か)。したがって、ヴァーベックは、上京以来、築地に住む必要がなかった。アメリカの少女クララ・ホイットニー (Clara Whiney) は、日記でヴァーベックが一八七六年(明治九年)当時は駿河台にいた、といっている(『又民子訳』クララの明治日記)上(講談社、一九七六年)、一一四頁)。

その後、一八七七年(明治一〇年)、ヴァーベックは築地居留地内に設立された一致神学校の講師となり、一八八七年(明治一〇年)、明治学院の設立に際し理事に推され、あわせて教授に任ぜられた。彼は一八九八年(明治三一年)に死亡したが、それは麹町紀尾井町の自宅においてであった(『大事典』、同箇所)。「居留地台帳」によると、彼は一八七四年(明治七年)一月二四日、イギリス人プラット・ポート (Thomas Pratt Poate) と共に築地居留地一七番Bを所有したが、一致神学校に籍を置くまではほとんど使用することがなかったと考えられる。

(2) 一九〇〇年版 *The Japan Directory* 一二八頁。

三 リリー・サマーズの回想

リリー・サマーズ (Lily Summers) は幼少のころ両親、妹二人および弟一人と共に来日、九十二歳で死ぬまで生涯のほとんどを日本で過ごしたイギリス女性であるが、一八八二年(明治一五年)から関東大震災まで築地に住み、英語を教えていた。彼女は一九五一年(昭和二六年)六月一、一八および二五日付 *Nippon Times* (現在の *The Japan*

Times）に回想記を寄せているが、一八八二年当時の築地居留地を次のように描出している。

居留地の外国人は主として宣教師で構成されており、なかでも米国聖公会およびローマ・カトリックが幅をきかせていた。当時はキリスト教のいかなる教派も日本人には食い込めず、……それにもかかわらず、宣教師たちの努力のいままでの成果は大きく賞賛されてよい。とくに彼等は日本人を研究し、日本人を深く理解したのである。

一八八二年といえは、築地居留地が開設されてすでに十年を経ているが、一般の外国人でここに住む者はまだそれほど多くなかった。リリーのいう通り、築地では宣教師が外国人人口の主体を占めていたのである。

宣教師は東京開市からあまり間を置かず築地に姿を見せるようになったが、一八七三年（明治六年）二月にキリスト教の禁制が事実上解かれるまでは公然と布教活動を行うことはできなかった。しかし、それ以前でも、居留地域内に住む外国人の信仰の自由は認められていた。例えば、日米修好通商条約は、第六条で、「日本に在る亞米利加人自ら其國の宗法を念し禮拜堂を居留場の内に置も障りなし」と

規定した。したがって、宣教師は一八七三年以前でも、日本に住む外国人のために来日できたのである。しかし、彼等の本来の目的が日本人の改宗にあったことは言を俟たない。彼等は、禁制の高礼の下で、教育・医療などの活動を通じて将来の舞台づくりを行ったのである。

一八七三年以降、首府・東京における布教活動は築地居留地を中心に公然と進められ、各教派はきそい合うようになり、宣教師を築地に送り込んだ。東京都編『築地居留地』は、築地が「商取引の互市場としてより、解禁になったキリスト教布教の足だまりの如くなり、その方面への発展が逆に築地居留地の性格を変化させていった。」と述べる（三四二頁）。たしかに、横浜、長崎、神戸などにつくられた居留地では貿易業に従事する外国人が非常に多かったが、築地では宣教師の数が商人のそれを圧倒していたのである。

— それでは、築地居留地の開設後、ここに姿を見せた最初の宣教師は一体誰であったか。

(1) リリーがいつ生まれたか、正確な日付はわからない。彼女は両親と共に横浜の外国人墓地で眠っているが、墓には、彼女が一九五八年（昭和三十三年）四月三〇日、九二歳で死す、と刻まれているので、一八六六年または六七年生まれということになる。

サマーズ一家は一八七三年八月一四日にサウサンプトンを

出港、一〇月九日、横浜に入港したが (*JWM*、一八七三年九月一三日、六四七頁、一〇月一日、七二八頁)、リリー自身は、イギリスを出発したとき六歳であったといっている。リリーが一九五八年四月三〇日に九十二歳になり、その日に他界したと仮定しても、一八七三年八月一日にサウサンプトンを離れたときは七歳であったことになる。彼女につき、全国市長会『市政』、一九八八年八月および九月、拙稿『英語の母』リリー・サマーズ』を参照されたい。

(2) リリーの父はお雇い教師として来日し、日本各地で英語・英文学を教えたが、例えば一八七五年版 *The Japan Gazette Directory* は Rev. James Summers として掲げられているので (五九頁)、牧師の資格をもっていたと思われる。しかし、彼が日本で布教活動を行った形跡はない。本稿では、このようなケースは取扱わないこととする。

四 クリストファー・カロザースの書簡

アメリカ長老教会の宣教師カロザース (Christopher Carothers) は、ジュリア夫人 (Julia D. Carothers) を同伴の上、一八六九年一〇月なかばから築地居留地に滞在するが、同年一二月二四日付書簡で次のように書いている。

現在、ここには外国婦人は三人しかおらず、みな宣教師に關係しています。ヴァーベック夫人、グリーン夫人、

史苑 (第六一卷二号)

そして私の妻です。……グリーン師夫妻はここに来てまだ一カ月も経ちません。……

ヴァーベック夫人は前述したアメリカ・オランダ改革派教会のヴァーベックの妻マリア (Maria)、またグリーン夫人はアメリカン・ボードの宣教師グリーン (Daniel C. Green) の妻 (名は不明) である。カロザースは、ヴァーベック夫妻はわれわれと三マイル以上離れたところに住み、ほとんど会いません、と書いているが、ヴァーベックは、前述したように、当時は神田一ツ橋にあった開成学校で教えていたのである。また、カロザースは、アメリカ長老教会の同僚で、一八六三年 (文久三年) から横浜にいたタムソン (David Thompson) の上京の予定にふれて、彼が横浜から築地に来れば東京の宣教師グループは四人の男性と三人の女性とで構成され、強力なものとなりましょう、と述べた。

すなわち、カロザースによれば、一八六九年末、宣教師として築地には彼およびグリーンがおり、タムソンが近くやって来る筈であり、また居留地域外にはヴァーベックがいた。

それでは、次にカロザース、グリーンおよびタムソンがいつ築地に来たのかにつき述べることとする。

築地居留地に来た最初の宣教師（川崎）

(一) カロザースとタムソン

カロザース夫妻については、筆者は東京市政調査会『都市問題』、一九九一年一月—一九九二年五月号に「カロザース夫人の見た築地居留地」と題する研究を発表したことがある。この研究で、夫妻が一八六九年七月二十七日（明治二年六月一九日）に横浜に到着したことを明らかにした。

幕府は、一八六八年一月一日（慶応三年十二月七日）に江戸を開市する予定でいたところ（結局、一カ年延期された）、築地に「外国人旅館」を建設することを決定した。この旅館は一八六八年八月十六日（慶応四年六月二十八日）、「築地ホテル館」(Yado Hotel)として部分的に開業し、のち、東京開市より一足早く本格的に開業する。そして、東京赴任が決定したカロザースは、一八六九年一〇月なかばごろ、ジュリアを伴って上京、この築地ホテル館に入った。そして、対借り地域で日本家屋を借り、改修が終わるまでホテル住まいをつづける。

夫妻が借りた家屋はホテルとは「道路で隔てられた角地」にあったが、対借り地域（南）の南小田原町または南本郷町、それもおそらく前者ではなかったかと想像される。夫妻は、この家屋に一八六九年一〇月末ごろ移ったと見られる。

一方、タムソンは、筆者の考えでは一八七〇年に入って

すぐに上京し（一八六九年末という説もある）、対借り地域にあった日本家屋を借りる。この家屋は対借り地域（北）の入船町にあったという記録がある。

いずれにせよ、タムソンおよびカロザースは、一八七〇年六月二日、狭義の居留地の地所を対象に行われた第一回競売に参加し、六番（三七九坪七合）を落札する。カロザースが監督し、日本人の大王がここに洋館を建設するが、同年九月末には建物は居住可能な状態となり、カロザース夫妻は日本家屋からここに移転する。以来、居留地六番はアメリカ長老教会の東京における活動の拠点となった。

タムソンは、一八七一年二月まで開成学校で教えることとなったため、居留地六番に建物ができたときは築地になかった。なお、一八七一年二月から翌七二年三月まで、ジュリアは米国に一時帰国した。

以上の詳細は、拙稿「カロザース夫人の見た築地居留地」を御参照願いたい。なお、「台帳」によると、タムソンは居留地二三番A（三三六坪二合）を入手しているが、それは一八八一年（明治一四年）一月一日のことである。

(二) グリーン

アメリカン・ボードは米国における最初の外国伝道組織であるが、グリーンは、アメリカン・ボードが日本に派遣

した最初の宣教師である(『大事典』、六二頁)。

グリーン夫妻は一八六九年一月三日(明治二年一月二七日)、横浜に到着した。夫妻は築地に来て、築地ホテル館に宿泊し、家探しをはじめた。彼等の上京の日付はわからない。

米国長老教会のコーンズ(Edward Cornes)は、一八七〇年二月二日付書簡で、グリーン夫妻は非常に快適に住んでいます(very comfortably settled)、と述べている。筆者には、当時夫妻がまだ築地ホテル館にいたのか、すでにホテルを離れ、相对借り地域で日本家屋を借り、入居していたのか判断がつかかねる。なぜなら、グリーンは東京滞在を切り上げ、一八七〇年三月一日、横浜を出帆し、神戸に向かっているからである。

『大事典』によると、彼はアメリカン・ボードが伝道の本拠地と定めた神戸に赴任したという(四六六頁)。グリーンにとつて、神戸への移転は予想外のことだったのではなからうか。

(1) 『都市問題』、一九九一年一月、拙稿「カロザース夫人の見た築地居留地」(2)、八五頁。

(2) 同、八一頁。

(3) カロザース夫妻の来日当時、JWMはまだ創刊前であった。夫妻が横浜に到着した日付は、カロザースが米国長老会本部

史苑(第六一卷二号)

のロウリー外国伝道局長に一八六九年七月二八日付で送った書簡および横浜に刊行されていたThe Japan Times' Overland Mailの一九六九年八月九日付(四六頁)による。

(4) 築地ホテル館について、筆者は日本ホテル協会Hotel Reviewの一九九二年一月から七月号に「江戸開市と築地ホテル館の建設」と題する研究を寄せたので参照された。築地ホテル館は、相对借り地域(南)に隣接して建てられた。図版では、南小田原町二丁目および南本郷町で囲まれたスペースがホテル館の跡地である。

(5) 『都市問題』、一九九一年一月、八一頁。

(6) The Japan Times' Overland Mail、一八六九年二月一日、一六二頁。夫妻は、サン・フランシスコ発の客船The Americanに乗り出した。

(7) 『都市問題』、一九九一年一月、八二頁、注27。

(8) JWM、一八七〇年三月五日、八三頁。船客名簿によると、この日上海へ向かう客船New Yorkに乗ったのはグリーンのみである。あるいは夫人は病气などの理由で築地または横浜に残り、あとから神戸に赴いたのであろうか。

五 カトリックの神父たち

カトリックの神父で最初に築地居留地に来たのは誰か。築地カトリック教会が一八八七年に刊行した『つきじー献堂百周年記念号』は、「築地にいつからカトリックの伝道活動が始まったのか、現存する史料からは確かめ難い」

築地居留地に来た最初の宣教師（川崎）

としながらも、一八七二年二月一日（明治五年一月一日）付のプチジャン司教（Bernard Thadée Petitjean）の手紙に「東京に学校があり、「二人の宣教師（マラン）Jean-Marie Marin および Felix-Nicolas-Joseph Midon）が……フランス語を教えるのに一生懸命です。」とあり、伝道は明治四年の秋ごろはじまったのではないかと述べる（五二―三頁）。そして、同書によると、学校は鉄砲洲の稲荷橋に近い借家にあつたらしい（五四頁）。

一方、『大事典』によると、一八七一年夏ごろ横浜からミドンおよびマランが東京に出張し、一八七三年（明治六年）春夏の侯、八丁堀鉄砲洲の稲荷橋脇の商家を入手し、布教にあつた、という（八八一―二頁）。稲荷橋は図版で「イナリ橋」として描かれている。相對借り地域（北）の北端、南八丁堀三丁目あたりにあつた。

パリ外国宣教会は、海外の布教地では現地人教区司祭養成のために神学校を設けたが、東京については、一八七一年二月、麴町三番町に神学校（「伝道学校」と称した。）が開設され、アルムブリュステール（Henri Armbruster）が初代校長となつた（『大事典』、七一頁）。

筆者には、築地居留地域外の麴町になぜ神学校を置くことができたのか、その理由がわからない。フランス公使館の付属施設の体裁をとつたのであろうか。また、アルムブ

リュステールは築地から通つたのか、または公使館員の資格を得て三田の濟海寺に住んだのであろうか。

この神学校は、一八七四年一月、神田猿樂町に移転した（『大事典』、三四七頁）。

パリ外国宣教会は、カトリック布教の東京における拠点として、麴町（のち神田）および築地をもつていたことになる。

『つきじ―献堂百周年記念号―』がカトリックの伝道活動が築地で開始された時点という明治四年の秋とは、西暦ではいつごろであらうか。明治四年九月は一八七一年一月一四日から一月二日、同年一〇月は一八七一年一月一三日から二月一日である。『大事典』はミドンおよびマランが一八七一年夏ごろ東京に出張したというが、彼等はこのころ上京、しばらくしてフランス語の教授などを通じて伝道活動を本格的に開始したのであろうか。

― いずれにせよ、カトリックの神父が築地に姿を見せるのは、アメリカ長老教会のカロザースが同地に居を定めた約二年後ではなかったかと考えられる。したがって、築地居留地に最初に来た外国人宣教師はカロザースであり、つづいてアメリカン・ボードのグリーンが来た、と結論することは許されるのではなからうか。

(1) プチジャンは那覇を経て、一八六二年一月、横浜に到着する。一八六二年一月八日付 *The Japan Herald* によると、七日に琉球から横浜に客船 Vice Admiral Koopman が入港しているが(一頁)、拙見であるがプチジャンはこれに乗船していたのではないか。

彼は翌六三年七月、長崎に移った。一八七六年六月、南緯聖会および北緯聖会が成立した際、南緯代牧となり、翌年、大阪に司教座を定めたが、一八八〇年、ふたたび長崎に移った(『大事典』、一二二六頁)。一八七二年二月当時、彼は長崎にいたことになる。

(2) 『大事典』によると、一八七二年四月(明治五年三月)、麴町三番町に「ラテン学校」が設立されたという(三四七頁。なお一五四、八八一頁)。同書はまた、一八七一年から横浜天主堂にあったラテン学校がのち東京の神学校(伝道学校)に吸収されたというが(一四八七頁)、東京のラテン学校はこの神学校の一部で、フランス語などの外国語を教えていたであろうか。

(3) すでに述べたが、フランス公使館は三田聖坂上の濟海寺に置かれていたが(一八七七年(明治一〇年)五月、永田町二丁目に移転した)、『Du Bousquet 通訳官は築地に住んだ』(『外務省調査月報』、一九八七年、No. 1、拙稿「江戸にあった外国公館」、六〇〇六一頁)。アルムプリユステールが同通訳官の住居の一部を借りていた可能性はあろう。

六 外国人人名録より

築地居留地は、前述したように一八六九年初頭に開設された。外国人人名録は、各版とも大体その前年の状況を反映していると考えられるが、一八七〇年版 *Japan Herald Directory and Hong List for Yokohama* (一八七〇年三月一日刊)は題名の示す通り横浜在住の外国人のリストで、東京に住む外国人は扱っていない。

参考までに述べれば、この人名録に「宗教団体」(Religious Bodies)の欄があり(四頁)、当時の在横浜の牧師・宣教師が数名掲げられている。一八六二年以来日、関内居留地一〇五番に建立された教会堂の初代チャブレンとなったベイリー(M. B. Bailey)のほか、アメリカ長老教会のタムソン、ローマ・カトリック教会のエヴラール、サルモン(A. Salmon)⁽²⁾およびマランの四人の宣教師の名がある。このうち、タムソン、エヴラールおよびマランは、のち横浜から東京へ移った。

一八七〇年版人名録の「宗教団体」は、在横浜宣教師のリストとしては最初のものであったかも知れない。

* * *

一八七一年版 *The Chronicle and Directory for China, Japan and the Philippines* の東京の項には「在京各国公使

築地居留地に来た最初の宣教師（川崎）

館のリストが掲げられているにすぎない（二七六頁）。

* * *
一八七二年版 *The Japan Gazette Hong List and Directory* に東京の項があるが（四一〜三頁）、宣教師は一人も載っていない。

* * *
一八七三年版人名録としては *The China Directory* しかない。東京の項にアルムブリュステールの名が掲げられており（s一〜三頁）、人名録を資料とする限り、彼が東京にいた最初の宣教師ということになる。しかし、すでに述べたように、実際には一八六九年一〇月ごろから築地に宣教師が住み付くようになったのである。

アルムブリュステールは、すでに述べたように一八七一年末に開設された神学校の初代校長となった。この神学校は麴町三番町にあったが、人名録はアルムブリュステールの住所を「19 (Jin-ku-ban)」としている。これは三番町十九番地という意味であろうか。または、築地の狭義の居留地一九番をさしているのであろうか。後者は、一八七〇年六月の競売で横浜のドイツ商人セーイド (Ernest Seyd) が落札したが、セーイドはここに建物をつくり、アルムブリュステールはその一部を借りて、毎日麴町の神学校に通っていたのであろうか。

* * *
一八七四年版人名録も *The China Directory* しかない。東京の項（s一〜七頁）には宣教師は一名も掲げられていない。アルムブリュステールも消えているのである。

- (1) 『大事典』では B. M. Bailey となっている（一二六七、一四六六頁）。
(2) 『大事典』では Marie-Amédée Salmon（五八三頁）。

七 東京府の調査より

東京府は、府内または築地居留地に在住する外国人の調査をときどき実施したが、その調査結果の多くは東京都編『東京市史稿 市街篇』に収録されている。

一八七一年九月一六日（明治四年八月二日）、東京府は外務省の依頼により、築地居留地にいた外国人数を調査した。当時の外国人は計七二名、戸数は四三であった。外国人の内訳は米国人二〇名、イギリス人一六名、フランス人六名、プロイセン人一〇名、オランダ人二名、スイス人六名などであるが、数を示したのみで氏名・職業・住所などは明かでない。戸数については、狭義の居留地に八戸、相對借り

地域に三五戸あつた。

いずれにせよ、この調査からは宣教師として誰が築地にいたのか明らかにし得ないのである。

* * *

一八七三年一月、東京府の手で府内居住の外国人の調査が行われ、結果は東京都公文書館蔵置の『明治六年雜留』(G6 D7 15)に収められているが、まず狭義の居留地に住む宣教師は次のようであつた。

六番 邪蘇新教宣教師 米国人
テウワイトムソン
チリストフルカロソロス

英語学校教師 妻 壹人

一七番 宣教師 米国人
ワンプソン
コーク

「テウワイトムソン」および「チリストフルカロソロス」はそれぞれ既出のアメリカ長老教会宣教師タムソン (David Thompson) およびカロザース (Christopher Carrothers) である。「妻 壹人」は、もちろんカロザースの妻ジュリアを示す。彼女は前年からA六番女学校で英語を教えていた。

史苑 (第六一卷二号)

「ワンプソン」および「コーク」がいた一七番は、在横浜のドイツ商人パトール (Wilhelm Patow) が落札、二軒の建物をつくつた。府の調査では、この二つの建物の居住者として、パトールのほか W. H. Thompson, Thomas Pratt Poate, Verbeck (前出) 等がおり、また朱書きで「白露公使外士官十一人旅店」となっている。「ワンプソン」とは、W・H・タムソンのことであろうか。一方、プラット・ポートルおよびヴァーベックは、前述したように一七番Bに住んでいたが、前者は教師であり、また後者は当時は大学南校の教頭で、いずれも宣教師ではなかつた。

「白露公使外士官十一人」とは、ペルーのガルシア・イ・ガルシア公使 (Aurelio García y García) とその随員一〇名のことで、彼等は一八七三年三月から同年九月まで一七番Aに滞在した。府は、調査実施後、朱書きで彼等を取りストに加えたのである。

いずれにせよ、「ワンプソン」および「コーク」のアイデンティティーについては、さらに資料を探さなければならない。相對借り地域にいた外国人については、フランス人の「オンプストル」がカトリック宣教師として掲げられている。南八町堀三丁目八番地を住所としているが、彼が既出のアルムプリユステールであろうか。そうであれば、彼は築地に住み、麴町に通つていたことにならう。

築地居留地に来た最初の宣教師（川崎）

- (1) 『東京市史稿 市街篇』、第五二（一九六二年）、一二二—二頁。
- (2) 東京都職員文化会『職員文化』、一九八五年頒春号、拙稿「築地居留地に設けられた外国公館—ペルーの使節団・公使館—（1）」、三二—五頁。
- (3) 『東京市史稿 市街篇』、第五四、一六三—七頁。

結びに代えて

資料がとほしいため、初期の築地居留地で活動していた宣教師について、その氏名、来京・離京の日、住所等の基本データを十分に示すことができなかった。一八七三年二月のキリスト教解禁までは公然と表立った布教はできなかった。宣教師たちの活動の実際の姿はとくに把握しにくいといわなければならない。

しかし、築地居留地に最初に来て住み付いたのはアメリカ長老教会のカロザース夫妻であったことは断言できると思う。筆者は約十年前、たまたま夫妻の日本での動静について研究したことがあり、その成果は本稿でも引用したが、夫は一八七六年一月、米国長老教会の宣教師を辞任せざるを得なくなり、これが契機となって、同年四月、日本独立長老教会が設立された。この教会は、その後しばしば名称や所在地を変更しつつ、現在の巣鴨教会まで連続としてつ

づいている。

ジュリア夫人は、すでに述べたように、一八七一年二月から米国に一時帰国したが、日本に戻った直後の一八七二年三月はじめ、居留地六番にA六番女学校をオープンした。A六番女学校は、東京に関する限り女子教育のための最初の施設で、この学校も紆余曲折を経て、現在も女子学院として健在である。

初期の築地居留地にいた外国人で、劣悪な生活環境に耐えながらも日本の近代化に尽力した人々は多い。カロザース夫妻もそのような外国人であったといえるであろう。彼等が鬼籍に入つて久しいが、「骨を埋むるも名を埋めず」と白居易がうたった通りに、彼等は現代の日本になおその名をとどめているのである。

〔付記〕ヴァーベックのフルネームは、日本の文献ではふつうGuido Herman Fridolin Verbeckと綴られるが（例えば、『大事典』では一二四六頁、『国史大辞典』吉川弘文館、一九九一年）、第一二巻、三六六—七頁）、外国人人名録各版では Fridolin Guido Verbeckとなっている。本稿には他にも例が出ているが、宣教師の氏名に異同がある場合が少なくない。正しいものに統一するようにしたいものである。

（筑波女子大学教授）